

---

# 感じる「死」と希望

箕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

感じる「死」と希望

### 【Nコード】

N2591K

### 【作者名】

篁

### 【あらすじ】

母の死と姉との会話・・・

(前書き)

拙著『綺麗な嘘』がこの度、出版されました。  
是非ご一読いただけましたら、幸いです。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

嘘を付いたこと、ありますか？

僕の名前は孝<sup>たかむら</sup>。妹、碧<sup>あお</sup>の元カレ、木下くんは自殺か他殺か？

木下くんの妹、実咲<sup>みさき</sup>と出会った僕は・・・。

・・・大人になりかけの人へ 篁の青春ミステリー・・・  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

作品名： 『綺麗な嘘』

出版社： 日本文学館 (2010/03)

ISBN - 10 : 4776522101

ISBN - 13 : 978-4776522102

発売日： 2010/03

「なあ、姉さん」

「ん？」

姉の聡美ちゆうみが寝転んだまま首だけ動かし、僕の方を向く。

僕たち姉弟のお袋があっけなく死んでしまつて、もう一週間。

親父は僕たちが小さい頃にどこかに行つてしまつたとお袋は言つていた。

それが、お袋と親父が離婚したという事実を指し示しているのに気がついたのは、小学生の高学年になつた頃だろうか……。もしかしたら、三つ年上の姉の聡美が、僕にそう告げたのかもしれない。そんな記憶も曖昧で、それでも、お袋は愚痴をこぼすこともなく、僕たち姉弟を今まで育ててくれた。

喪主は、ただ長男であるから、という理由だけで僕に決まつた。だからといつて、高校二年生の僕に何かが出来るわけでもなく、叔父や叔母のいうとおりに黙つて座り、適当に集まつてくれた親戚達に挨拶をしただけだった。

通夜や葬式や、慣れない親戚やお袋の勤めていた会社の関係者への挨拶など、そんな無駄とも思えることに、時間を費やし、それでもまだ、お袋の死をなんとなく受け入れられない僕が居る。

僕たちは、屋根の上に登り、寝転んでいる。

九月下旬の夜風はどこか生暖かく、現実と非現実の境目にいるような錯覚を僕に起こさせる。

「死ぬことってどういうことなのかなあ？」

僕は煙草を取り出しながら、そう姉に訊いた。

「お母さんのこと？」

姉は聞き返す。

ゆっくりと煙草に火を付け、星空に向かって煙を吐き出し、僕は言った。

「天国とか、地獄とかって、結局死なないことには現実にあるかどうかなんて分からないでしょ」

「そうね」

「死ぬって事は、全くの『無』になるってことなのかなあ」

「あのさ、徹ていとお、どうしたの？」

姉が顔を寄せてくる。

「これからはさ、僕と姉さんと二人で、この家に住むことになるんだね」

「嫌なの？」

姉は、通学できる範囲の短大を選択し、これまでは三人家族として生活してきた。

朝起きて、お袋が居ないことに気づき、先に起きた方が朝食を作る。

そこかしこに、お袋が居ないという現実を突きつけられても、素直にそれを受け入れることには少し抵抗があった。

「いや、なんとなく二人で生活していくのかあ、って思うとちょっと不思議だね」

「どう不思議なの？」

「いや、単にお袋が居なくなっただってことなんだろうけどさ、違和感があるんだよね」

「違和感？」

「そう。記憶にははつきり焼き付けられているお袋の姿をもつ見ることは出来ない。死ぬってことは極端なことなんだなあ」

「確かに極端よね。こないだまで普通に生活していて、急に居なく

なる。もう思い出での存在でしかなくなるって、受け入れにくい感覚ではあるわ」

姉の聡美も、なんとなく僕と同じ感じを持っているようだ。

お袋の死の原因は、脳溢血だったらしい。

普通に暮らしていたお袋が、急に倒れ、そのまま何も言わずに死んでしまった。

僕たちはお袋の死に際を知らない。

早めに大学から帰った姉が、居間に倒れているお袋を発見したときは、もう息はなかったらしい。

「死のうと思っただ事って、ある？」

「なんなの？ 徹、いじめにでもあってるの？」

「まさか。ただ・・・」

「ただ？」

「死ぬってどんな感じなのかなあって」

「ま、実際に死なないとそんなこと分からないわよ」

「うん」

再び姉の聡美は、仰向けになり夜空を眺め始める。

「ところで、徹」

「うん？」

「いつになったら、煙草やめるの？」

「多分、高校を卒業する頃には」

「へえ」

短くなった煙草を屋根瓦で揉み消し、指先で空中にはじき飛ばす。姉は続けて訊いてきた。

「煙草をやめたら、どんな感じがすると思う？」

「分からないな。苛々するのかな？ それともなんとなく寂しく感じるのかな？」

「多分、それよ」

「え？」

「私たちは、お母さんの死に際を知らない。気がつけばもう死んでいた」

「うん」

「お母さんが最後に何を言いたかったのか、どれだけ苦しんだのか、全く分からない」

「そうだね」

「だから、急に居なくなつたお母さんに対し、少し苛々してるし、寂しさも感じてる」

「ああ、なるほど」

「徹の彼女が急に別れ話を言い出したら、どう感じる？」

「少し悪戯気のある表情で、再び姉は僕に質問する。」

「僕の彼女って・・・」

「知ってるわよ」

僕は、姉の大学の友人である瑞穂みずほの顔を思い浮かべる。

「絶対に聡美には内緒だからね」

「なんで？」

「なんでって・・・友達の弟とこんな関係になってるって、なんだから気恥ずかしいじゃない」

「そうかなあ」

姉の聡美が何度か家に連れてきたことのある瑞穂とは、なんとなく気が合った。

気さくな姉は、自分の部屋ではなく居間に瑞穂を案内し、そこで

テレビを眺めていた僕と出会った。

気がつけば、いつも姉から無愛想だと言われている僕が、瑞穂とは気兼ねなく話すことができた。

こうした機会が何度もあり、姉が席を立ったとき、瑞穂は僕にこっそり携帯番号を教えてくれた。

姉と同じ年齢なのに、姉には感じることの出来ない、大人の女性という感覚に戸惑いながらも、僕たちはやがて関係を持ち、それは今でも続いている。

姉からお袋の死の連絡を携帯で聞いたときも、僕は学校をさぼり、瑞穂と映画鑑賞し、公園でお互いの感想を話し合っていたときだった。

勿論、瑞穂はお袋の葬儀には姉の友人という立場で出席してくれた。

姉には内緒にしていたはずの瑞穂との関係を姉は気づいていたのだろうか……。

暫く、姉の顔を無言で眺めていた僕は、漸く言葉を発する。

「姉さんがなにを知っているのかは知らないけど、仮に僕に彼女が居たとしよう」

「うん」

「その彼女と急に会うことが出来なくなったり、別れ話を切り出されたら、やっぱり僕は色々と考え込むと思う」

「例えば？」

「自分のどこが駄目なのだろうか、という具合に自分に対して否定的な感覚を持つかもしれないし、理由が分からなければ落ち着かないだろうね。勿論、寂しさや辛さも感じるだろうし、もしかしたら怒りを覚えるかもしれない」

「瑞穂でしょ？」

「なにが？」

僕はとりあえず、とぼけてみることにした。

「まあ、いいわ。でも、その感覚が、今、私たちが感じているものなの」

「というと？」

「お母さんが何を普段何を思っていたか、考えたことある？」

「ないかも・・・」

「私もよ。いつも仕事で忙しくして、滅多に夕食も一緒に食べられない。それが私たちを養うために働いてくれているのだから当然だとも思っていた」

「うん」

「でも、お母さんだって、私たちだけのために生きていたわけじゃないと思うの」

「そりゃ、そうだろうね。『仕事が面白い』って何度も聞かされたし」

聡美は、僕のポケットから煙草を取り出した。

僕は、煙草を銜えた姉の煙草に火を付けてやり、自分も煙草を吸うことにする。

少し顔をしかめながら、煙草の煙を吐き出した姉は会話を続ける。

「お母さんが何を考えていたのか、正直なところ、分からない。急に死んでしまって、今更、自分の人生をどう感じながら過ごしてきたのかを確認する方法もない」

「うん」

「お母さんの死は、ある意味、私たちの存在を無視したところにあるわ」

「ちよつと話が難しい」

僕の抗議に耳を傾ける様子もなく、姉は続ける。

「お母さんの本当の気持ちを知らないまま、私たちはお母さんの死を受け入れないといけない」

「そうだね」

「それって、理由も聞かされずに、恋人に別れ話を切り出された感覚に似てると思わない？」

「あつ」

姉の言いたいことが漸く分かった。今度は僕が話し始める。

「お袋の死が急すぎて、今までお袋のことをあまり理解してなかったんだってという事実を改めて突きつけられた」

「そう」

「だから、何故か自分を責めてしまい、自分自身の存在が宙ぶらりんになる」

「お母さんが中心の家庭つてわけじゃなかったのにね」と姉は煙草の煙を夜空目指してふうつと吐き出す。

「うん。お袋の死を受け入れるには、これからまだまだ寂しさや辛さ、そして誰に向けていいか分からない怒りを感じなきゃおかしいんだ」

「多分、徹の言うとおりよ」

「そうかあ、これから徐々に受け入れていくんだろくな」

「そうね」

社会人になった僕は、今でもあの時の禅問答のような姉との会話をはつきりと覚えている。

お袋の死を徐々に受け入れ、その感情も時と共に希薄になっていく。

赤ん坊の泣く声が聞こえる。

はっとした僕は、分娩室の前に駆け寄る。

「おめでとございます。立派なお嬢ちゃんですよ」

看護婦の声に誘われ、分娩室に入る。

瑞穂の表情は幾分やつれてはいるものの、目には喜びが溢れている。

瑞穂の腕に抱かれた赤ん坊は、その名のとおり、顔を真っ赤にして泣いている。

「瑞穂、やったな！」

「うん」

未だに父親になったという実感はない。

それでも嬉しい。

この娘には、僕の全てをさらけ出して生きていこうと決意する。

一緒に泣いて、笑って、瑞穂と共に彼女を見守っていこうと決意する。

不意に僕が事故か何かで、この世を去っても、親父という存在をきっちり捉えていてくれるように……。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2591k/>

---

感じる「死」と希望

2011年1月3日22時09分発行